文は1863年から1864年にかけてイギリスのロンドンで一年未満の留学生活を送った。イギリス留学は伊藤にとってイギリスと日本との、非常に圧倒的な国力の差を目のあたりにした機会である[12]。そして、維新前後の伊藤は政府公務で海外出張があったため、多数回アメリカを訪れた。同17日付の記事で、「近年アメリカを訪れたことのある伊藤氏は公共事業省次官で、日本では国営になっている造船、鉄道、電信の任にあたっている。伊藤氏はまだ30歳ほどだが、進歩的で開明的な、前途有望な政治家である[13]」と、伊藤の訪米履歴や政治的地位などが報道された。また、副使らが上陸したばかりでイギリス製洋服を脱いでアメリカの紳士服に着替えたのは、アメリカ世論の前に日米親善の意を伝え、アメリカ近代文明を受容しようとする姿勢を示していたのであろう。そもそも儒学の雰囲気の中で育てられた伊藤にとって、衣冠束帯という伝統的着用形式から洋服着用が定着した変化は、自らの文明観の発展過程を示したのみならず、日本の進歩を世界に宣言しようとしたことを意味している。

副使らの洋服着用に対して、正使の岩倉具視の衣冠束帯は特に目立った。岩倉の生涯の思想と行動を顧みると、村上源氏の意識、尊皇・勤王の意識、廷臣の意識という三つの生涯特徴が岩倉公の歴史的役割としてまとめられた[14]。即ち、岩倉公の一生を貫いたのは、京都公卿の家柄の矜持による、国学思想が顕著に見られる保守的忠君愛国の信念である。この点から考えると、日本伝統を守った束帯の岩倉の様子からその意義を窺える。一方、岩倉は完全に保守的政治家とは言えない。2月6日付のThe Milwaukee Sentinelにおいて、「岩倉氏がその国において最も有能な人物であると見なされている、外交的交渉における氏の腕前は、氏と連絡を取ろうとする西洋各国の代表の自負の気性を試している。氏は最近外国寛容への考え方に転向している、長い間頑強に反対していたものの、最終的にそれが氏の祖国にとって必要のある有益なものであると認識している[15]」という維新前後の岩倉氏の西洋文明に対する価値観変遷のアウトラインが描かれている。

因みに、3月4日にワシントンのホワイトハウスで行われた大統領謁見式と国書捧呈式において、使節団の正装は、大使と副使らが衣冠であり、書記官が直垂の着用のうえ帯剣した。翌日（3月5日付）のNew York Timesは、謁見した日本人使節の服装を「宮廷服」として報道した[16]。

また、同行した日本人女子留学生も報道の焦点となった。同16日付のDaily Evening Bulletinは、「蒸気船で到着した女子留学生たちはニューヨーク州のポキプシー町にあるヴァッサー大学に送られた。彼女たちはそこで徹底的な教育を受ける。彼女たちは教科書以外のものだけでなく、この国における淑女のマナーとしきたりを教えられると望まれている。これらのきれいな女子学生がDe Long夫人の保護に置かれている[17]」

ここで言及された「Mrs. De Long」は、1869年から1876年にかけて駐日アメリカ特命全権公使のCharles E. Delong（1832－1876）の夫人である。Delong氏は1871年に岩倉使節団に同行し、家族とともに一時帰国した。氏はカリフォルニ